



主な内容

- ③新型コロナウイルスワクチン接種
- ④マイナポイント支援室を開設
- ⑤年末・年始のごみ収集カレンダー
- ⑥清瀬市省エネ家電買換補助金

「寄り添うこと」の大切さ

12月3日～9日は障害者週間、12月4日～10日は人権週間

「障害者週間」は国民の間に広く障害者の福祉について関心を深め、障害者が社会におけるあらゆる活動に積極的に参加する意欲を高めることを目的として、障害者基本法の改正を機に定められたものです。

また、「人権週間」は、障害のある方はもちろん、すべての人の基本的人権及び自由を尊重し確保するために第3回国際連合総会で、世界中の国々が達成すべき共通の基準である「世界人権宣言」が採択された日に合わせて定められたものです。

市はこれらの週間に合わせ、障害や福祉、また、人権について関心を深めるためのさまざまなイベントを実施しています(詳しくは2面に記載)。

この機会にあらためて、「思いやる」とは何か、また、自分にできることは何かなどについて、考えてみてはいかがでしょうか。

問 障害者週間に関すること＝障害福祉課障害福祉係 ☎042-497-2073、人権週間に関すること＝シティプロモーション課市民協働係 ☎042-497-1803

全国中学生人権作文コンテスト

このコンテストは、次代を担う中学生が人権問題についての作文を通し、人権尊重の重要性や必要性の理解を深めることで、広く一般の方にも人権尊重を根付かせることを目的として実施しています。

今年度は、清瀬第五中学校2年生の安井杏奈さんが書いた「寄り添うこ

との大切さ～自閉症の弟が教えてくれたこと～」が市の代表作品として選ばれました。以下に、全文(一部加筆・修正)を掲載します。ぜひ一読ください。



清瀬市選出作品

寄り添うこと大切さ ～自閉症の弟が教えてくれたこと～

清瀬第五中学校 2年 安井杏奈

私には小学6年生の弟がいる。弟は、重度の自閉症だ。言葉が話せないため、コミュニケーションをとることがとても難しく、自分の気持ちを上手に伝えられない。また、行動や考えにこだわりが強いため、生活の中で苦労する場面が多く大変だ。

私は昔から、弟に対して我慢せざるを得ないことが多々あった。例えば、弟は自分の欲求を伝えられないため、私が見ているテレビや使っているゲームを何も言わずに無理やり取ることがある。私が抵抗すると、奇声を上げて嘔みついてきたり、大暴れすると手が付けられなくなる。そのため、結局は私が我慢して諦めなければならないのだ。辛いのは私なのに、親は大泣きする弟に付きっきりで、どんな時も我慢するのは私だった。

私には弟との忘れられない出来事がある。家族でイチゴ狩りに出かけた時のことだ。お客さんたちが並んで順番を待っていたが、弟には並んで待つという行為が理解できなかった。両親が一先懸命説明しても納得できず、弟は周りに大勢の人がいるのにも関わらず、地面に寝転びながら大声で泣いてしまった。すると、周囲の人たちは驚き、弟と私たち家族をとて冷たい目を見た。私はその視線が嫌で嫌で仕方なく、その場から逃げ出した。私は少し離れたところから弟が泣き止むまで見ていた。その後、30分ほどしてやっと泣き止み、イチゴ狩りができるようになった。しかし、私は周囲からの視線と逃げ出してしまった罪悪感から、とてもイチゴ狩りをするような気分になれなかった。そんな私の横で、弟は満面の笑みで大好きなイチゴをほおぼり、とても嬉しそうにしていた。そして、両親は弟に対して「イチゴ早く食べたかったよね。よくがんばったね。」と言って弟と一緒に笑っていた。その光景を見てはっとした。私は自分の気持ちばかりを考えてしまい、弟の行動に込められた気持ちに気づいてあげられなかった。

私は、この時逃げ出してしまったことをとても後悔したが、この出来事があったからこそ気づいたことがある。私は、無意識に弟のことを恥ずかしい、人と違って嫌だ、と心のどこかで差別をしていたのかもしれない。弟は、気持ちを言葉にできないだけで、心は私と同じである。悲しければ泣くし、嬉しければ笑う。あの時、なぜ弟に寄り添ってあげられなかったんだろうと、今でも自分の取った行動に申し訳ないと思っている。すべての人にとって心は等しく、かけがえのないものである。大

切なのは、障害の有無に関わらず、お互いを認め合い、相手の立場を考えて、思いやりのある行動をすることだと思う。今後、私にできる第一歩として、勇気を出し、相手の気持ちを考えた声かけから始めていきたい。もし、弟のように話すことが難しい人がいても、気持ちの伝え方はたくさんあると思う。例えば、ジェスチャーを使ったり、表情、話す声の強弱などを工夫することもできるのではないかな。私は、弟との出来事をきっかけに「誰か」のことではなく「私自身」の言動がその人らしさを守ることに否定することにもつながる、ということをお忘れなくしていきたい。

最後に、私には最近嬉しいことがあった。特別支援学校に通う弟と、近所の学校に通う同じ小学6年生の生徒たちが手紙による交流を図っているのだ。弟からの手紙は、両親が代筆し、弟の障害や日常生活についてなどを伝えている。相手の生徒たちは、イラストや質問、学校で流行っていることなどを書いてくれ、それを両親が弟に見せ、読んであげている。なかでも私が嬉しかったのは、相手の生徒たちが弟のために漢字にふりがなをふってくれたり、「がんばってね。」などの応援のメッセージを書いてくれることだ。弟を想ってくれる友達ができたことは、とても素晴らしいことであり、弟もきっと喜んでいと思う。この子たちのように、障害があっても受け入れ、寄り添ってくれる人が一人でも増えていくことを心から願っている。

私にはもう一つ、嬉しいことがあった。それは妹が生まれ、弟が少し変わったことだ。身近に赤ちゃんがないため、弟は大丈夫だろうか心配だった。最初は、遠くから妹を見て緊張しているようだったが、慣れてくると、自分から優しく頭をなでたり、妹が泣くと心配そうな表情をするようになった。私には、弟の中に妹への愛情が芽生えてきたように感じ、安心したし、嬉しかった。

おそらく、妹がしゃべるころになると、「お兄ちゃんはどうしてこうなの？」と弟に対しての疑問がたくさん出てくると思う。実際に私もそうだった。だからこそ、妹には少しずつでも弟のことを理解して大好きになってほしい。そのためにも、家族で弟に寄り添うことが特別ではなく「当たり前」だということを、私も行動で示して伝え続けたい。

そして、今、この瞬間、私の横で笑う弟のように、世界中にいるすべての人が「その人らしく」笑顔になることを願っている。(一部加筆・修正)

